
meis-mois

meri

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

meis - mois

【Nコード】

N2412BA

【作者名】

meri

【あらすじ】

およそ1万円でも仕事を請け負う、悪いことをして人の役に立つ、13人の不思議な力を持った人ならざる集団のお話。

暴力的で残酷的な描写があり、いじめ・複雑な家庭環境・恋人関係の纏れなど、なんでも出て来ます。一応ほのぼのもしていますが、基本暗め。苦手な方はご注意ください。

登場人物（前書き）

ちよつとした登場キャラクターのご紹介。

登場人物

meis - mois (メイス＝モウ)

舞台となる国の首都・トリーズ13区郊外にある大きな屋敷に住んでいる集団。

探偵とも、秘密結社とも、大家族とも。

金さえ払えばなんでもする。その金も一回につきその国の最高額100ヤール紙幣一枚。

顔を見た者はいるが、メンバーは何年も容姿が変わらないという噂が実しやかに囁かれている。

ノル
noll

meis - moisの創設者にしてボス。性別不詳。仕事で書斎に引き籠っている。

ジャンヴィエ
janvier

男。法という法を犯しまくる問題児。

ヘルミク
heimikuu

女。特技はハニートラップ。お酒と年下の女の子が好きな姉御。

マーシュ
mars

男。ジャンヴィエ曰く「顔面で得してる」美少年。メンバーのスケジュール管理を任されている。銃や火器に精通している。

アヴリル
avril

女。猪突猛進な怪力娘。家事全般が得意。

Ma i u s マウス

中性的な男。聖者のような生真面目で誠実な人。時間を渡る能力を持つ。

j u n i ジュニ

女。マウスと仕事をこなす相棒。ステッキと分厚い法律の本が手放せない。機敏。

j u l i ジュリ

男。寡黙な縁の下の力持ち。五感に優れ、言霊の力を持つ。家事から日曜大工までなんでもこなすお父さんキャラ。

a u t o オート

男。見た目は一番年下だが、一番偉そう。好きな言葉は「喧嘩両成敗」

s y s u k u u シユースク

男。ラッキーボーイ。霊感が強い。痛覚がなく、体の破損等で死に至ることはない。しかし本人はスプラッタ物は苦手。ジャンヴィエとウットと仲良し。

S i o n シオン

女。戦いは苦手。治癒能力があり、能力上シユースクやリオンと行動することが多い。

R i o n リオン

男。メイスIIモワ切つての破壊神。攻撃を一手に引き寄せ、本人も不死身の体を持つが、シユースクと違い痛覚は健在なので、シオンがいなければさあ大変。

Deon
デオン

男。自室で日々を過ごす引き籠り。ノルさえも特別視する、異質な存在。

とある国の首都・トレーズ。その13区の郊外にある古びた洋館。人を拒むように閉ざされた門は錆びていて、自生していたと思しき蔦が門や外壁を覆う。この家の噂を聞き付けたのか、その門に設置されたポストからは手紙が溢れ出ていた。これは人のいない屋敷ポストに長年蓄積されたものではない。ここ一週間の内に、夜ないし早朝の人目につかない時間帯に、人々が自らここへ入れるのだ。

「100ヤール札一枚をご依頼書と共に同封下さい。成功報酬はほんのお気持ちで結構です。紙切れ一枚で腐りきったあなた様の世界を変えて下さいまし」

ラミネートされた何の変哲もない一枚の紙が、蔦に巻き付けられてそこにある。まるでこの家の住人がこれを商売にしているようだ。これとその溢れ返ったポストを見て、依頼内容を書いた手紙と金を持参した人は、噂は本当なのだと確信する。そしてこの深夜にも一人、息を切らし思い詰めた様子で、すでにキヤパシテイの超えたポストに大事そうに握り締めくしゃくしゃになった封筒を押し込んだ。

「そばかすのニールが来たぜ。今日も暗い顔してんな」

「昨日見たホラー映画に出て来たあいつみたいな奴があっさり殺さ

れてたよ」

「あー、あいつって真っ先に殺されそう。蟻みてーだもんな。根暗だし、何言ってるのかわかんねーし、きもいし」

朝、いつものように登校し教室に入って、「おはよう」と誰からも声をかけられず開口一番がこれ。本人にわざと聞こえるように、教室の片隅の机に我が物顔で座る三人組。

そこは僕の席なのに……。言いたくても言えない言葉をニールは飲み込んで、彼らと目を合わせることなく机のフックに鞆をかけた。そうすることで彼らはいつも「根暗がうつる」と楽しそうに逃げて行くのだ。

ニール・アルフォード、17歳。この学校の二年生。所謂いじめられっ子で、成績は良いものの引っ込み思案な性格と、幼い頃からの視力の低下による分厚い眼鏡とそばかすにより、苛めの対象とされている。

中高一貫のこの学校で彼はこれに四年間も耐えて来たが、遂に限界に達した。というのも、教師に相談しても彼らはいじめっ子に注意こそしても、当人がそれを否定してしまえばそこまでであり、教職員を目指すニールはそれに幻滅した。

体を張って庇ってくれた小学生時代の恩師のような教師ばかりではなかったのだ。

「今に見てる……」

殴られて腫れの引かない痣だらけの顔で、ニールは怒りに震える。彼の手元には印刷済みのコピー用紙が一枚。

噂を聞き付け三ヶ月。中々踏ん切りがつかなかったが、その教師の対応でこの先の安息を望めなくなったニールは、アルバイトで貯めていたお金を手に、先日あの郊外の洋館へ向かった。

最初は怖かった。依頼文を書いた時は感情任せだったとしても、夜中にあの古びた洋館に赴くのはホラーもサスペンスも苦手なニールには至難の業で、そこでようやく頭が冷静に働いたからだ。

この依頼文には住所や氏名を書かなければいけないと、インターネットの裏サイトにはあった。もしも、犯罪者予備軍として警察に通報されてしまったらどうしよう。成功したと書き込んでいた人たちもサクラだったら？

しかし、あの洋館を調べれば調べるほど、古くからその噂はあったことを知った。それこそ祖父母の代よりも、もつと昔だ。褪せることのない門前の案内文。一体誰が住んでいるのか、住民票に登録もなく書類上は空き家らしい。その不気味さが逆に真実味を増した。

「お前たちも近い内に、ぼくと同じ目に遭うんだ」

ただの復讐心からきた少年の叫び声を受け取った男は、似たような文章が記された手紙の多さに、少し微笑ましげになる。彼の心中なんて全く察していなかった。

「またこの手の依頼ですか。多いな、いじめっ子への復讐っていうのは」

封蝋まできちりとされた手紙を読み、ノルは大きな溜め息を吐く。これまで何度こないじめっ子への復讐を請け負ってきただろうか。

実際には彼ではなくその手足となって働く12人・・・、否11人の人たちなのだが。

つまらなさそうに羊皮紙の手紙を摘まみ、脱力してやや猫背になり、一応文面に目を通す。住所からしてこの街の3区に住む17歳の少年、ニール・アルフォード。

癖のない書体からして頭の良さそうな子だ。

「なるほど。大方、容姿か頭の良さを妬まれて悪質ないじめに長年遭ってる幸薄な少年、と言ったところでしょう。お馬鹿さんですねえ・・・」

やれやれ、と机の上にあるアンティーク調の電話の受話器を上げた。もう何百年も買い換えていないのに、故障することなく動いてくれるこの電話の作り手はさぞかし優秀な職人だったのだろう。

まあ買い手のノルも今となってはどんな店で買ったのかすら覚えていないが。

「ああ、ジャンヴィエですか？・・・ええ、お仕事ですよ。アヴリルと一緒に書齋に来て下さいな」

この電話は屋敷内専用。つまり内線専門の電話。各メンバーの自室にある固定電話とそれぞれ繋がっている。

受話器を元の位置に戻すとちん、と軽い小さな音を立てる。そこではた、とノルは思い出した。

「ああコッチで買ったものではないですね、そういえば。マイヤが下さったものでしたっけ・・・？あれ、ユノでしたっけ？・・・嫌ですね、年は取りたくない」

ムコウの女からの贈り物。それだけは覚えている。

コッチへ来る時に選別にと貰ったもの。道理で壊れることなく動くはずだ。よくよく考えると電話線も繋がってはいない。もう自分が何歳かも覚えていない。途方もない時間を生きている。

ごろんと書斎の大きなウッドデスクに突っ伏し、日当たりの良いその場所で「加齢やだ」と呟いた。

長い髪がさらさらと肌を撫でて落ちてきて、最近変えたシャンプーの匂いが鼻腔を擽る。あれは失敗だった。CMで大々的にフローラルの香りを謳ってるくせに、これじゃ香水を被った方がマシとさえ思うほどの悪臭。

「本当、人って節度を知りませんねえ・・・」

やだやだ。

昼下がりの陽気な日差し。人間は節度を知らなくても自然は今この時期に丁度良い日差しの強さを知っている。

ジャンヴィエとアヴリルが来るまで一眠りしようか。故郷に似た日差しの中で。

自分たちのような存在に睡眠も食事も必要ない。ただコチラでの生活があまりに長くなった所為で、空腹を苦痛と感じてしまうのは予想外だった。

時にはうたた寝をしたい時だったある。今日のような日差しが穏やかな日には、埃っぽい書齋に籠るより、窓を開けっ放しにして新鮮な空気を取り込んで、目の前に広がる中庭で横になりたい。

以前それをしていたら、マーシユに「依頼書が飛んで行ったらどうする」とこっ酷く叱られた。個人情報管理法・・・、また人間がそんな面倒な法律を作ったと朝刊で目にした。

法律なんて守らなかつたからと言って裁かれることもないのに、この住人たちは一人を除きやけに法を尊重する人間臭い連中になっ
てしまった。

育て方を間違えましたかね・・・。

夢の中で呟いた気がして、がつんと頭の上に重たい何か落ちて来た。頭上への落下物とそれにより顎が机にめり込みそうなほどの衝撃のダブルパンチ。

「おっさん、人呼び出しておいて昼寝か？」

「ちよつとジャンヴィエ、ノルになんてこと・・・！」

この憎たらしい声とそれを咎めるおどおどした声。最近よく仕事を流すのでいくらまどろんでいても聞き間違えるはずがない。

睡眠の為に外していた大きな黒縁の眼鏡を掛け、ノルは眉間に皺を寄せ一分と“待て”の出来ない青年、ジャンヴィエに呆れたように溜め息を吐いた。

彼の手にはこの部屋の本棚にある分厚い生物図鑑。あれを容赦なく落としたのだから、頭蓋を割る気かと静かな怒りが湧く。

「こんなに早く来るとは思いませんでした。思いの外、早くジャンが捕まっただんですね、アヴリル」

「あ、いえ今日は

「は？ 遅げーよ。俺がアヴリル捕まえたんだよ。こいつユーリと家庭菜園なんか始めてっから。その所為でマーシユが裏庭に耕運機持ち込んでんだけど」

「ああ、あれですか。自給自足がしたいと言うので私が許可しました」

「やかましいんだよ、お前から辞めさせる」

今更何を言い出すのか。もう一週間以上も前から、マーシユが異国から仕入れた農作業機を意気揚々と使っているのは、この屋敷では周知のこと。

ずいっと身を乗り出して抗議するジャンヴィエを不審に思い、「また女のところか」とノルは腹の中で再度溜め息を吐く。

「品行方正なマーシユと歩く煩惱のあなたとでは話になりませんよ、ジャンヴィエ。無断外泊は許しませんとあれほど言っただろう」

怒った時にややその目の色を濃くするノル。その変化をすぐさま見

抜いた、説教部屋常連のジャンヴィエは、まだ何も言っていないのに、そこまですべてに露骨に肩を震わせた。

自室の窓から「煩い」と怒鳴った後、耕運機の上から勝ち誇ったように鼻で笑ったマーシユのシユールな凶が脳裏を過り、それが余計にジャンヴィエに地団太を踏ませている。

「あー！マジでむかつく！てめえあいつが深夜3時に俺の部屋の壁をダンダン叩いて睡眠妨害してんの知らねえーだろ！普通の奴なら逃げるべ、女のとこに！」

「あなたの酈がうるさいとマーシユが不眠症だったので私が提案しました。それとジャンヴィエ」

「あ、あ！？」

「それ以上喧しくするとお嬢さんに行けない体にしますよ」

ずっと椅子から立ち上がり、その高い頭の位置からジャンヴィエをどす黒い顔で見下ろす。本気だろう。

お嬢さんに行けない体とは如何ほどのことが不明だが、ただならぬ物を感じたジャンヴィエは途端に大人しくなり、「お座りなさい」とノルに言われるまま、いつも仕事の話をする時に使うソファアにすでに腰を落ち着けていたアヴリルの隣に、身を縮込ませて落ち着いた。

向かいには「お待たせしました」とアヴリルに一言断り、二枚の紙を持ってノルが座る。柔らかなソファアが彼の体重で沈んで端が皺になった。すつといつものようにテーブルに差し出された書類。そこに並ぶ、ノルが要点のみを押さえた文章に二人は視線を落とす。

「この近くのハイスクールの生徒でしょう。悪質ないじめに遭って

いるようなので、それを排除してほしい、と」

すぐに仕事内容の大まかな部分は察したのか、ジャンヴィエの眼の色が変わった。彼はすぐに書類に手を取り、その“方法”を探しているのかぎよるぎよると忙しなく二つの眼球が泳ぐ。

年齢からして、このジャンヴィエくらいの少年だ。まあ彼の実年齢云々の話は隅に追いやり、ノルは情が移ってしまったのか「惨い話だ」と嘆く。

「いつの時代も、人はこんなことばかりですね。地球上でもっとも賢いなんて持て囃されながら、何一つ学習しない」

「言えてます。もう何世紀もこの手の依頼は受けてきた。尤も、手を下したのはあなた方ですけどね」

落ち着き払ったアヴリルは軽蔑するかのようにテーブルの上の書類を見下ろし、拳を二三回鳴らす。先ほどのジャンヴィエとの口論でお疲れ気味のノルはソファアに身を沈めそれに答えた。

じつと書類にがつついていたジャンヴィエもようやく全て読み終えたのかそれをくしゃくしゃにして壁際のダストボックスへ投げ込む。

「だから俺とアヴリル呼んだのか」

「ええ。適任でしょう?」

「ここまできると嫌がらせの部類だな」

「あなたは本当に被害妄想が多い。マーシユの件なら後から私が言っておきますから、大人しく働いて来なさい」

言えば、どんつとテーブルが強く叩かれその拍子にすつと目の前の人影が立ち上がった。今度はジャンヴィエがノルを見下している。子どものように、真面目に怒った時もすぐに表情に出る、わかり易い子だ。

言い過ぎたとはノルも思っていない。それが自分の仕事であり、これに異を唱えるのならいくら可愛げのない可愛いジャンヴィエと言えど、説教部屋ではなく折檻までグレードを上げなくてはいけない。

「あなたの言いたいことはわかります。ですが適者です。それがこのルールです。アヴリル、あなただけでも遂行なさい」

「もちろんです」

「ジャン？返事をなさい」

割り切って仕事を承諾したアヴリルと違い、ジャンヴィエの声は聞こえない。これがなければ自らに逆らう者と認めなくてはいけない。ちらつと前髪の間隙から覗き見ると、ジャンヴィエは何とも言えない顔をしていた。

悔しそうな腹立たしそうな。この子が人として生きていたなら、間違いないこのニール少年を違う意味で救えただろう。

そんな仮のことを思っても仕方がない。手の焼ける子にノルも立ち上がり、床と睨み合うジャンヴィエの頭を軽く叩いた。

「返事を、しなさい」

「.....」

「ジャンヴィエ、私に逆らうのか」

ほんの少しだけ、自らの権力を示威するかのように穏やかなはずの
声が低く唸る。これで尚、逆らうことを選択をするほど、ジャンヴ
イエも正真正銘の馬鹿ではない。

「わかった……。やりや良いんだろ、やりや」

「ええ、そうです。やれば良いんです」

いつもノルは革の手袋をしている。だからこの人の温度を知らない。
何度も自分を慰めるように頭の上に優しく降って来るその無機質な
ものに、ジャンヴィエはまた虚しさを募らせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2412ba/>

meis-mois

2012年1月6日02時48分発行